

松木日向緑地プログラム 松木日向緑地の竹林整備 + 「都立大で竹を切ろう！」 (体験会)

2020年12月5日 (土)

報告



都立大で竹を切ろう！

12月5日(土)、「都立大で竹を切ろう！」と題し、プログラムメンバー以外の学生を受け入れ、竹林整備を行いました。

少雨のためプログラムの流れを少し変更し、冒頭では牧野標本館別館で「多摩の里山学」の受講生と共に本プログラムのアドバイザーでもある加藤英寿先生から里山保全や緑地が抱える課題についてお聞きしました。その後、雨が弱まった11時頃から体験者を交えた竹の間伐を行いました。

体験会実施の考え方について

地域ボランティアプログラム“松木日向緑地プログラム”では、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、プログラム1年目の学生を募集できなかったため、昨年度から継続して参加している3年目以上の学生(リーダー)のみで活動しています。この竹林整備活動に関わる学生の数が減ってしまったことはもちろんですが、それに加えてオンライン授業や前期までのキャンパス立ち入り制限等により、新入生を含む都立大生の多くがキャンパスに訪れる機会があまりないことから、本プログラムで扱う社会課題の一つ「本学が有する豊かな資源に対する認知度の低さ」、つまり、“本学の学生が松木日向緑地を知らないこと”についての課題が深刻化しています。

毎年、プログラムメンバー以外の学生を受け入れる体験会(活動+学習)を実施してきましたが、今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、竹林内での活動を前提に、少数の体験者を交えて竹林の整備に取り組むことにしました。ディスカッションなどを通して議論したり、そこから学びを得たりする機会は、社会情勢に応じて設けていきたいと考えています。

竹の伐採をサポートしている様子



当日の様子

今回の活動は、連携団体である「ひなた緑地遊学会」、「多摩の里山学」と連携して実施する予定でしたが、少雨により活動を中止する団体もいたため、当初用意していたプログラムの一部を変更して実施しました。

活動の冒頭では、牧野標本館別館で「多摩の里山学」の受講生と共に加藤英寿先生から里山保全や緑地が抱える課題についてお聞きしました。今年度は特に竹の過密化が深刻になっており、そこに対してどのような解決策が考えられるのか、そもそも「大学の敷地内にある緑地」としての意義は何かなど、改めて、研究、自然環境、地域の里山といった様々な観点から松木日向緑地について考えることができました。

雨が弱まった11時頃からは、竹の伐採体験を始めました。竹に対してどのようにのこぎりを入れるのか、どの方向に竹を倒したらよいのか等、基本的なことはプログラムメンバーが適宜説明していきました。しかしながら、竹は自分の背丈の何倍もありますので、そう簡単には切れません。経験豊富なプログラムメンバーが時には実演しながらサポートし、竹の伐採、枝落としなど一通りの流れを安全に行うことができました。

参加者の声

自然観察が好きで、都立大でも日向緑地の活動にぜひ参加してみたいと考えていたので、今回参加できてとても良かったです。

前半の講義では松木日向緑地の背景や現状等について他地域や学内での実践を交えて聞くことができ、勉強になりました。特に、大学緑地としてのあり方という視点はこれから保全・整備を行う上で重要だと感じます。

後半の伐採体験では、竹の切り方や枝落としを丁寧に教えて頂きありがとうございました。斜面で竹そのものを切るだけでなく、枝を落としてまとめる作業までを体験し、整備作業の大変さを学ぶことができました。一方で、実際に伐採をしてみると作業前よりも林内が明るくなっていて、伐採の効果を実感しました。

前回に続き、今回の活動の様子も本センターのYouTubeチャンネルで公開していますので、ぜひご覧ください。

 都立大ボラセン
YouTubeチャンネル

当日の様子を公開中!

